

平成 26 年 6 月 26 日現在

機関番号：32623

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520591

研究課題名（和文）様態性の尺度に視点を置く英語副詞配列の分析とその言語習得論的検証

研究課題名（英文）Theoretical and Empirical Study of Adverb Placement and Scale of Manner in English

研究代表者

鈴木 博雄 (Suzuki, Hiroo)

昭和女子大学・人間文化学部・教授

研究者番号：50187754

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000 円、（間接経費） 480,000 円

研究成果の概要（和文）：本課題研究期間全体を通して、申請者の提唱する「様態性の尺度」という副詞の配列基準の妥当性を検証し、その成果を論文、研究書執筆等により公開した。具体的な研究成果は、次の5点である。①「様態性の尺度」と英語副詞配列傾向の相関、②様態副詞の結果用法と、結果構文における「結果」の概念の相違、③VP右方付加論に基づく文末状況副詞句配列の統語的妥当性、④副詞の多重主題現象及び補文中の副詞の文頭移動現象に主眼を置いた、文頭の状況副詞句生起条件、⑤文頭、文中央部、文末の状況副詞句（副詞的挿入句も含む）の「サスペンス効果」。以上の5項目についての研究を深め、学界の発展に貢献した。

研究成果の概要（英文）：During this research period, the researcher investigated more deeply the adequacy of the "scale of manner" with adverbials, postulated in Suzuki (2008), a Ph.D. dissertation at Tohoku University. The achievements were publicized in a conference presentation, several papers and one book published in 2014. Concretely, the following 5 items were attested both theoretically and empirically; (i) correlation between the scale of manner and adverbial placement, (ii) conceptual difference in "result" between resultative predicates and manner adverbs, (iii) syntactic adequacy for the right-adjunction-to-VP approach concerning the sequence of circumstantial adverbials, (iv) unified functional conditions on such adverbials as are observed not only in the multiple-theme sequence of circumstantial adverbials but also in the adverbial extraction from the embedded clause, and (v) the "suspense effect" which can be observed at all 3 adverbial positions in a sentence.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学 英語学

キーワード：英語副詞配列 叙述・修飾構造 様態規則 様態性の尺度 事象完結一時取消機能 結果構文 場面設定 サスペンス効果

1. 研究開始当初の背景

本研究報告者は、Jackendoff (1972: Ch.3) の副詞配置論及びその延長線上に位置づけられる Cinque (1999) や Ernst (2002) の副詞認可論に、Greenbaum (1969) を先駆とする機能論的副詞論を組み込んだ副詞研究の成果として、鈴木 (2008) (博士論文、東北大学) において、新たに、「様態性の尺度」という視点から、英語副詞の統語的・意味的・機能的特性を論じた。(なお、「様態性の尺度」は Kuroda (1968) の発想を原点としており、例えば、*tonight, mathematically, kindly, loudly* を比べると、左から順に「様態性」の度合いが高くなる、というような観察を手掛かりとしている。)

「様態性の尺度」を取り入れた副詞研究は、副詞の「位置」及び「配列」に対する包括的な説明を与えることに、一定の成果を収めることができた。一方、各論レベルでは、十分に解明しきれていない統語・意味現象も残されていた。加えて、同尺度が心理的にどの程度妥当なものであるのか、ということについては、言語習得論の立場からの検証を行う必要もあった。

以上のような経緯から、「様態性の尺度」を基盤としながら、英語副詞配置・配列の統語的・意味的・機能的条件を一層明示的に記述・説明することに主眼を置いた研究を開始した。

2. 研究の目的

本研究の目的として、1960 年以降の英語副詞研究として、統語論的副詞論 (副詞配置論、副詞認可論) と意味論的副詞論 (機能論的副詞論、語彙意味論的副詞論、形式意味論的副詞論) を踏まえながら、本研究報告者の提唱する「様態性の尺度」という副詞の配置・配列基準の妥当性を検証することを、その目的とした。

3. 研究の方法

具体的には、①様態性の尺度の精緻化 (様態副詞の結果用法に主眼を置く)、②文末の状況副詞句配列、③文頭の状況副詞句生起 (副詞の多重主題現象及び補文中の副詞の文頭移動現象に主眼を置く) についての研究を、この順序で進めた。

研究計画最終年度には、英語母語話者や日本人英語学習者の言語直観・知識と、副詞の記述・説明の摺り合わせを行うことにより、本申請課題の記述・説明の妥当性を高めた。

4. 研究成果

本課題研究期間全体を通して、本研究報告者の提唱する「様態性の尺度」という副詞の配列基準の妥当性を検証した。

具体的には、英語叙述・修飾構造に関する次の 5 点に関する知見を深め、その成果を、学会発表、論文発表、研究書出版により公開した。

- (i) a. 「様態性の尺度」と英語副詞配列傾向の相関。
- b. 様態副詞の結果用法と、結果構文における「結果」の概念の相違。
- c. VP 右方付加論に基づく文末状況副詞句配列の統語的妥当性。
- d. 副詞の多重主題現象及び補文中の副詞の文頭移動現象に主眼を置いた、文頭の状況副詞句生起条件。
- e. 文頭、文中央部、文末の状況副詞句 (副詞的挿入句も含む) の「サスペンス効果」についての研究。

以下、各年度ごとの研究成果をまとめる。

(1) 23 年度

23 年度上半期においては、Ernst (2000, 2002) の「様態規則」と Wickboldt (2000) の「様態副詞の事象完結一時取消機能」を組み合わせながら、結果副詞と結果形容詞 (結果構文における結果述語) が相補分布の関係にあることの反例と判断される用例を取り上げ、両品詞が関わる英文の文法性の違いを引き起こす原因を分析した。その研究成果を、日本言語学会 (2011.11.26、於：大阪大学) において口頭発表し、更に、論文、鈴木 (2012) を学界に発信した。

具体的には、結果副詞と結果形容詞による結果状態の具現化のされ方の違いを、コーパス等で収集した現実の用例を検討しながら、「事象完結一時取消機能」が適用され易いか否か、という点に求めた。結果副詞に同機能が観察される要因として、次の 2 点を導き出した。

- (i) a. 結果副詞は、語彙的に様態副詞から統語派生しているため、様態規則 (manner rule) における「比較」の概念を取り入れ易い、つまり、「比較」の概念が原因事象と結果事象の発生上の時間差を生み出す。
- b. 結果形容詞に比べて、結果副詞は主観的な判断を話し手が表明する場面で使用される傾向がある (cf. Broccias (2008))。この主観的判断が、「比較」の概念を結果副詞に取り入れ易くし、延いては、「事象完結一時取消機能」の適用を容易にしている。

上記 2 点は、結果副詞と結果形容詞の機能論上の違いを生み出す主因である、という結論に達する過程について、鈴木 (2012) で論じている。同論文の要点は以下のとおりである。

- (ii) の 2 文のように英語では、a) 結果副詞 (resultative adverb) 及び b) 「(結果構文における) 結果形容詞」により、事象形成後の目的語等の結果状態を叙述することができる。(iia) の *marvellously* は直前の目的語 NP (*chrysanthemums*) の属性というよりも、言語化されていない「(菊の) 出来映え」に対して直接の属性を与えている。一方、(iib) の *red* は直前の目的語 NP (*the wall*)

の属性を直接、叙述している。

- (ii) a. He grows chrysanthemums marvellously. (Quirk et al. (1985: 560)) (彼の栽培する菊の出来映えは見事だ。)

- b. John painted the wall {red,
*redly}.

結果副詞については、結果構文 (cf. (iib)) の論考で補足的に言及されることがあるものの、その機能についてはこれまで必ずしも有力な説明がなされていない。上の(ii)を分析した鈴木(2012)では、Wickboldt (2000)による「事象完結一時取消機能」に焦点を置きながら、結果副詞と結果形容詞の機能の違いを明らかにしている。(以上、鈴木(2012: 15)に基づく。)

上の鈴木(2012)で論じた、英語及び日本語の結果構文研究の進展に寄与することが期待される研究に加え、Hasselgård (2010)の副詞論を援用しながら、文末における英語状況副詞句の機能統語論的分析も行った。この分析を、次年度の研究で更に深めた。

(2) 24年度

24年度は、叙述・修飾構造に関する最新の文献精読により理論的基盤を固め、その成果をコーパスから収集した用例に照らし合わせながら、記述的・説明的妥当性の高い副詞論を深化させた。具体的には、

- (i) a. 23年度に引き続き、Hasselgård (2010)の副詞論を援用しながら、文末における英語状況副詞句の機能統語論的分析を深め、複数の状況副詞句の不規則な配置に対して、機能論的根拠を与えた。

- b. 文頭における状況副詞句の生起条件について、ヨーロッパ系の生成文法において最近注目されているカートグラフィック・シンタックスにも着目し、機能統語論に基づいた分析を行った。

特に、(ib)については、Haumann (2007)の節頭階層に依拠した、副詞が関与する多重主題構造(multiple-theme construction)の統語分析の延長線上に、Haegeman (2012)のカートグラフィック・シンタックスに基づいた節頭副詞統語論を位置づけ、以下2点に焦点を置いた研究を進めた。

- (ii) a. 節頭(文頭)に複数の副詞が生起する多重主題現象についての機能論的分析。

- b. 補文中の副詞の文頭移動現象の分析。

研究成果として、(ii-a)については、副詞句も含め、複数の話題(topic)が多重主題を形成する機能論的・意味論的根拠を求めることの意義、及び(ii-b)の補文中の副詞の文頭移動現象の分析については、統語分析の限界を踏まえ、Pesetsky (1987)の「指示性(referentiality)」の概念を援用しながら、主節と副詞句がそれ

ぞれ、焦点(focus)と話題(topic)のいずれの機能を担うのか、ということに着目した機能論上の条件を求めることの意義について考察し、鈴木(2013c)を論文として発表した。同論文は、Haegeman (2012)の次の点、すなわち、節左端(left periphery)への、項(argument)や付加詞(adjunct)の移動制約について、多数の用例を挙げながら、カートグラフィック・シンタックス(cartographic syntax)に基づいた議論を展開し、従来の主節現象を再考するとともに、主節現象が観察される(iiic)のような副詞節に着目しながら、(iii)の文法性の差を引き起こしている統語上の要因を積極的に究明している点を重視し、(iii)に見られる、項や付加詞の移動制約に関する Haegeman (2012)の考察および統語分析が、節左端における英語副詞の機能統語論の構築に十分に貢献し得ることを論じている。(以上、及び以下の用例(iii)は鈴木(2013c:72-73)に基づく。)

- (iii) a. When she began to write her regular column again, I thought she would be OK.

- b. *When her regular column she began to write again, I thought she would be OK.

- c. If on Monday the share price is still at the current level then clearly their defense doesn't hold much water. (Observer, July 11, 2004: 22, col.5) (Haegeman (2012: a=11, b=x, c=d=155, e=156, 下線筆者))

(3) 25年度

25年度には、まず、鈴木(2013b)において、「話し手の命題への関与の仕方」が異なるものの、「話し手が命題に関与する」という点においては、(ia)の態度離接詞(attitudinal disjunct)は(ib)の文体離接詞(style disjunct)とも機能的に関連している点に配慮しながら、Greenbaum (1969)における態度離接詞の分類に基づき、様態性の尺度の観点から、同副詞の機能論的特性を明らかにした。

- (i) a. Strangely, Mary was absent from the meeting.

- b. Frankly, Tom will not get the first prize in the contest.

つまり、「様態性の尺度」という観点から、態度離接詞は、その純然たる機能に加え、文体離接詞の機能をも担うことがあり得る、ということを中心に論じた。この、同論文が提示した論点を敷衍すると、態度離接詞の接合詞(conjunct)的機能や法副詞の再分類についての妥当な説明が可能になる。換言すれば、法副詞を再分類する過程で、Cinque (1999)による Mood や Modality の観点からの分類と Ernst (2002)による Epistemic の観点からの分類の長短が明確になる。また、態度離接詞の接合詞的機能を解明する過程において、

(ii)の両文の主題(下線部)の機能上の差違も効率的に究明することができる。

(ii) a. This supper dish may be simmered gently on the hob or baked in the oven — yes, baked beans! It is surprising how many men enjoy cooking their own baked beans.

(BNC、下線筆者)

b. This supper dish may be simmered gently on the hob or baked in the oven — yes, baked beans! Surprisingly, many men enjoy cooking their own baked beans. (第2文はa.の第2文を筆者が書き換えた)

(以上、鈴木(2013b:50, 57-58)に基づく)

次に、鈴木(2013a)において、英語の副詞を副詞たらしめている主因は、「様態性の尺度」である、という筆者の考えを前提とし、<「様態性の尺度」を基盤とする「副詞の言語的直観」>の検証基準(iii)について論じた。

(iii) a. 副詞の主語指向性

b. 様態副詞による結果状態の叙述

c. 従属節からの副詞句文頭抜き出し

d. 態度離接詞と文体離接詞の機能的連続性

e. 副詞節における主節現象

上の (iii)の各項目は、(iv)のような重要な論点を含意する。

(iv) a. 「副詞の主語指向性」については、副詞が主語 NP の属性を副詞が叙述するという、形容詞のような機能にも着目する必要がある。しかも、主語指向副詞が関与する的確な句構造について、最新の統語論においても説得力に富む提案がなされていないのである。つまり、「副詞の主語指向性」に対する言語的直観の検証を行う上での構文解析上の検証方法の開発が必要となる。

b. 「様態副詞による結果状態の叙述」については、「結果構文における結果述語」と「結果用法の様態副詞」についての言語的直観が相関を成すのか、という問題を解決しておかねばならない。つまり、言語習得の過程で、「結果用法の様態副詞」についての知識は、「結果構文における結果述語」についての知識を前提として習得されるのか否か、という問題について検討する必要がある。

c. 「従属節からの副詞句文頭抜き出し」については、文頭副詞句と主節が多重主題構造を成す、ということに着目した副詞的直観の検証作業を行うことになる。その際、話題(topic)か焦点(focus)か、という文頭副詞句の情報特性を、専門用語(メタ言語)を使用せずに、被験者に意識させるための的確な文脈を明示する工夫が必

要となる。

d. 「態度離接詞と文体離接詞の機能的連続」についても、明晰な文脈を備えた談話(discourse)を被験者に提供せねばならない。例えば、(iia)の第2文の how 節の叙実性(factivity)と(iib)の第2文の主語 NP 以下の内容の叙実性の違いを、被験者から正確に聞き出すための文脈の提示法を考案する必要がある。

e. 「副詞節における主節現象」の言語的直観の検証が困難であることについては、鈴木(2013a)における用例(16)と関連させて論じている(詳細は省略)。

(以上、鈴木(2013a:7-8)に基づく)

最後に、鈴木(2013a)で論じた、英語使用者の副詞的直観を解明するための検証基準に基づいて実施した面接及びアンケートによる調査結果と、これまでに解明されてきた英語副詞論との摺り合わせを行うことにより、英語副詞の一層正確な記述・説明に貢献するための布石を打つことを目的として、鈴木(2014)を執筆した。

本研究報告者は、2013年11月から12月にかけて、12名の日本人・英米人英語使用者に対し、英語副詞の知識・直観に関する面接及びアンケート調査を実施した。面接対象者として、日本語母語話者8名(内訳: 留学経験があり TOEIC®が高スコアの学生4名(スコアは800~910に分布)、及び日常的に英語を使用する機会の多い英語に堪能な社会人4名)、アンケート調査対象者として、英語を母語とする日本在住の社会人4名(内訳: イギリス英語話者1名、アメリカ英語話者3名)から協力を得た。

調査協力者12名という人数は必ずしも十分な数ではないが、本調査では筆者の予想に添った結果が得られた。つまり、今後、電算処理を伴う大規模な調査・検証の前段階としての基礎的調査としては成功を収めることができたとと言える。(以上、鈴木(2014: 54)に基づく。)

本面接・アンケート調査から(v)のような一般化が得られた。

(v) a. 英語母語話者も日本人英語使用者も、様態性の強い副詞(e.g. *loudly*)はVP末部、主語 NP の属性を叙述するような副詞については、主語 NP の直後への配置を容認している。一方、「副詞の主語指向性」に対する感覚は英語母語話者に強く認められる。

b. 結果副詞については、英語母語話者も日本人英語使用者も、動詞が意味する「動的な」プロセスが含意される場合に、同副詞が使用される、というほぼ共通の感覚をもっている。

c. 従属節から取り出された副詞句のもつ情報を従属節内の情報と関連付けながら、具体的な説明をする傾向

が英語母語話者に顕著に認められるのに対し、日本人英語使用者には、談話の結束性(cohesion)に着目した説明をする傾向が認められる。

d. 視点副詞については、英語母語話者も日本人英語使用者も、談話の一貫性(coherence)に着目した説明を行うという点において共通している。

e. 英語母語話者には、従属接続詞を「本来的用法」と「周辺の用法」に区別する感覚が、日本人英語使用者よりも顕著に観察される。

f. 英語母語話者の方が日本人英語使用者よりも、明晰な文脈を想定しながら、文頭副詞の生起理由を具体的に説明することができる。

(v)の6つの一般化の過程において、以下のような貴重な観察が得られている。

(v-a)から、日本人英語使用者は、構文解析が前面に出る感覚が認められた。(v-b)から、英語母語話者は、単純形副詞(flat adverb)としての口語用法を容認する傾向があるのに対し、日本人英語使用者については、同傾向が低かった。(v-c)から、英語母語話者からは談話の一貫性(coherence)に基づいた、また、日本人英語使用者からは談話の結束性(cohesion)に基づいた直観表出の仕方を、その特徴として挙げることができる。(v-d)から、英語母語話者も日本人英語使用者も、着眼点は異なるものの、情報の流れに着目しているという点において共通した言語感覚を読み取ることができた。(v-e)から、日本人英語使用者であっても、文脈をしっかり説明すると、従属接続詞の「周辺の用法」が内面化されているものと思われる回答も得られている。(v-f)からも、文頭に生起する様態副詞に対する言語的感覚は、日本人英語使用者に、英語母語話者と同様か、あるいは、それに近い感覚も観察されている。(以上、(v)も含め、鈴木(2014:68-71)に基づく。)

本研究報告者が収集した用例や副詞研究文献で提示されている用例とその説明の対応関係が妥当なものであるか、ということを検証する目的で行った上述の面接・アンケート調査は、結果として、英語副詞についての言語直観と、本研究報告者が理論的に解明した内容との一致点及び相違点の導出に一定の成功を収め、日本人上級英語使用者の副詞的言語直観の獲得傾向は、意識的な文法学習量よりも自然な英語使用状況に接した時間量と相関するという結論を得た。同結論は、第2言語習得論における一般的仮説を間接的に検証したと言える。

本研究期間中、学会発表1件、論文6本(詳細は各年度実施状況報告書に記載)、図書2件を出版し、その内容を広く学界、社会に発信し、英語叙述・修飾構造論の今後の展開に貢献するための基盤整備を図ることができた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計6件)

①鈴木 博雄「英語使用者の副詞的直観に関する基礎的調査の結果と分析」『学苑』、査読有、882号、2014、昭和女子大学近代文化研究所、pp.54-72.

②鈴木 博雄「英語における副詞的直観を解明するための検証基準」『学苑』、査読有、876号、2013a、昭和女子大学近代文化研究所、pp.1-9.

③鈴木 博雄「様態性の尺度から見る態度離接詞に関する機能論的研究」『学苑』、査読有、874号、2013b、昭和女子大学近代文化研究所、pp.50-58.

④鈴木 博雄「カートグラフィック・シンタックスにおける英語副詞配列論の可能性」『学苑』、査読有、870号、2013c、昭和女子大学近代文化研究所、pp.72-82.

⑤鈴木 博雄「英語における結果状態の具現化のされ方について」『学苑』、査読有、858号、2012、昭和女子大学近代文化研究所、pp.15-24.

⑥鈴木 博雄「英語結果副詞の事象完結一時取消機能について」『日本言語学会第143回大会予稿集』、査読無、2011、日本言語学会、pp.106-111.

〔学会発表〕(計1件)

①鈴木 博雄「英語結果副詞の事象完結一時取消機能について」日本言語学会第143回大会、2011.11.26、大阪大学(大阪府)。

〔図書〕(計2件)

①鈴木 博雄『英語副詞配列論』ひつじ書房、2014.2.14、316。

②日本英語文化学会(編)、福島昇、高山信雄、岩谷道夫、佐々木隆、鈴木博雄、他20名執筆、「英語学研究史における20世紀後半以降の英語副詞研究の位置づけ」所収『英語文化研究』成美堂、2013.9.20、308(pp.262-273)

6. 研究組織

(1)研究代表者

鈴木 博雄 (SUZUKI, Hiroo)

昭和女子大学・人間文化学部・教授

研究者番号：50187754

(2)研究分担者：なし

(3)連携研究者：なし